

聖書:列王記第二章1～13節

説教:エフーに油を注げ

はじめに

続けて列王記第二を見てまいります。今回は8章24節まででしたので本来であれば25節以降を観るべきですが、今日は9章1節を開いています。これには理由があって、飛ばしたところが9章15節以降の話と関わりがあるので、その時一緒に見たいと思ったからです。

そのことを申し上げてから前回のあらすじを簡単に振り返ります。今からおよそ二千八百年前、南王国ユダの王であったヨラムは、主を捨てて主の目に悪であることを行いました。おそらく王の地位を守るためだったので、自分の兄弟を全員殺し、兄弟の側についていた有力者たちも皆殺しにしていく。それほど残忍なことをしたのですから当然神は罰するだろうと予想したら、そうではなかった。「主はそのしもべダビデに免じて、ユダを滅ぼすことを望まれなかった」とありました。主はかつてダビデに対して、あなたの家系は絶対に絶えることはないと言っていたので、それを守ったということですが、ではヨラムのした悪はどうなるのか。最終的には主の再臨の日にヨラムのしたことはきちんとさばかれるとは言いましたが、それまでは何もしない。ダビデと約束してしまったので今回は我慢してください、というふうにも聞こえます。では、殺された者たちたちはどうなるのか。結局彼らの死は無駄死にということになる。これではあまりにも不公平です。神はなにもしないのか。今日の箇所から考えていきます。

1 エフーに油を注げ

1) なぜ

今日の場面は、預言者エリシャがひとりの仲間を呼んでこのように告げるところから始まります。2, 3節。「ニムシの子ヨシャファテの子エフーを見つけなさい。家に入って、その同僚たちの中から彼を立たせ、奥の間に連れて行き、油の壺を取って、彼の頭の上に油を注いで言いなさい。『主はこう言われる。わたしはあなたに油を注いでイスラエルの王とする。』それから、戸を開け、ぐずぐずしていないで逃げなさい。』」

1節のところに、何の説明もないので、エリシャがなぜエフーを呼び出してこんなことをさせるのか、突然降って湧いたような話しの展開に戸惑って

しまいますが、実はそうではない。ずっと以前からこのことは計画されていたことでした。

2) 落胆するエリヤ

話しは列王記第一19章のところにさかのぼります。エリシャの先生であったエリヤが、たった一人でバアルの預言者四百五十人と戦わなければならなかったことがありました。バアルというのは当時の国家宗教です。彼らは国家ために都合の良いことしか言いません。なぜならアハブ王の妻であったイゼベルが資金を出して預言者たちを保護していたからです。聖書の神を信じるエリヤにはそのことが絶えられません。結局、バアルの預言者たちと戦うことになり、それに勝つのですが、エリヤの仲間たちはイゼベルによって殺されていました。さすがのエリヤも力を落とし、今で言う鬱状態になってしまった。

3) 主がエリヤに告げた三つのこと

そんなときに主がエリヤに語ったことばがこれでした。

「主は彼に言われた。「さあ、ダマスコの荒野へ帰って行け。そこに行き、ハザエルに油を注いで、アラムの王とせよ。また、ニムシの子エフーに油を注いで、イスラエルの王とせよ。また、アベル・メホラ出身のシャファテの子エリシャに油を注いで、あなたに代わる預言者とせよ。ハザエルの剣を逃れる者をエフーが殺し、エフーの剣を逃れる者をエリシャが殺す。」

言っていることは三つあります。順番が逆になりますが、まず一つ目。「アベル・メホラ出身のシャファテの子エリシャに油を注いで、あなたに代わる預言者とせよ。」これはすでにそうなっています。そして二つ目。「ハザエルに油を注いで、アラムの王とせよ。」これは、列王記第二章12節を見ると確かにエリシャはそこでハザエルがアラムの王となることを語り、実際その通りになっていった。そして三つ目。「ニムシの子エフーに油を注いで、イスラエルの王とせよ。」これがまさに今日の箇所に書いてあることです。エリヤのときにはこれは実現しませんでした。詳しい年数はわかりませんが、おそらく数十年経ったときにエリシャの手でこれが実現していきます。

主が定めたことがこのようにして実現していった。それはわかりました。ではその目的は何であったのか。それともなにも目的はなかったということでしょうか。

4) 神の計画に従って

新聞には占星術の欄があつて、何月生まれのあなたの今日の運勢というものが載ってます。例えば、牡牛座のある日の総合運というところには、「遊びに恵まれるけど、欲を出すと失敗する恐れも」と書いてありました。ある人はそれを読んで、今日はあまり欲を出さないようにしよう、と行って行動する。でもよく考えると、星の配置が人間の運命を支配しているのなら、人生は思い通りには行かない、ただ風に吹かれるま右に左に飛ばされるだけということにもなる。それで納得できるでしょうか。だれでも、自分はなぜ生まれてきたのか、どこに向かっているのか、それはどんな理由なのか、知りたいと思っっているはずです。かつて私はそれが分からなくて悩んでいました。それであると聖書に出会い、すべて人が生きることに理由があり、生きる目的があると書いてあるのを知って、感激した覚えがあります。人間に生きる目的があるということは、神がなさることも当然、すべてに理由があり目的があるはずです。

5) アハブの家はことごとく滅び失せる

目的はこうでした。7節。「あなたは、主君アハブの家の者を打ち殺さなければならない。こうしてわたしは、わたしのしもべである預言者たちの血、イゼベルによって流されたすべての主のしもべたちの血の復讐をする。」

ユダの王となったヨラムは、主に逆らい、主の目に悪であることを行いました。なぜそんなことになったのか。聖書には「アハブの娘が彼の妻だったからである」とあつて、アハブの妻、すなわちアタルヤが夫であるヨラムを悪の道に誘い込んだようなのです。そのアタルヤの父親がアハブ、母親がイゼベル。罪は父と母からその娘へと受け継がれ、嫁いだ先の夫にも強い影響を与えていきます。この一族がしたことを神はじつとご覧になっています。決して見逃していたのではありません。「わたしのしもべである預言者たちの血、イゼベルによって流されたすべての主のしもべたちの血」とあります。預言者たち、主のしもべたちがイゼベルの手で殺されていくとき、まるでご自分のからだ引き裂かれたかのような強い痛みを覚えながら忍耐されていたのです。イゼベルによって殺された者のために、

主は必ず復讐をします。そのことは次回見ることに なります。

2 神の救いとさばき

1) 今も繰り返されている悪

復讐とか、人が人を殺すというような話、そんなことよりもっと楽しい話を聞きたいと思うかもしれません。しかし私たちが生きているこの世界はどんなところでしょう。先日、第二次世界大戦のとき、ドイツに占領されたチェコスロバキアの様子を描いた映画を見る機会がありました。首都プラハに駐在するドイツの高級将校を暗殺するためにイギリスから二人の軍人が密かに潜り込んで、地元のレジスタンスの協力を得ながら作戦を成功させていきます。ところがドイツはその報復として五千人の市民を虐殺し、ある村の女性と子どもたちは全員収容所に送られていったと言うのです。事実に基づいた話だというのはのですが、心が塞がるような思いがしました。でも、同じようなことは、ニュースではほとんど報じられなくてもいまのロシアとウクライナの戦いの中で起こっているはず。これが私たちが住んでいる世界です。毎日人が殺されていくのに、神はどこにおられるのか。神はなにをされているのか。神は本当におられるのか。だれでも疑問に思うはず。同じ疑問を預言者エリヤも持ちました。大勢のバアルの預言者を敵に回しながら、何とか戦いに勝った。作戦は成功したのに、主の預言者は全員殺されてしまった。イゼベルはなおごり高ぶって権力を思うがままにふるい、真実がねじ曲げられ、悪が栄えていくようにしか見えない。彼は立ち上がれなくなるくらい落胆しました。

2) 必ずさばきと救いはおこなわれる

でも今日の箇所から教えられます。神はなにもしていないのではない。ずっと先を見据えてご計画を定めておられる。その計画は時が満ちたときに必ず果たされていく。ただ私たちにはそれがいつ果たされるのかわからない。だから、神が何もされていないかのようにしか見えないだけだった。

それはよい。では、殺された人たちはどうなるのでしょうか。死んでしまったら手遅れではないのか。たとえあとから神が復讐しますと言われても納得できない。もし手遅れということなら、結局、神は正義を守る方と言われても、人間の罪の前に神も限界があるということになります。

3) 死からよみがえられたイエス・キリスト

でも、そんなはずはない。主は私たちの罪を背負われて十字架で死なれました。その時は確かに、神も人間の罪には勝てなかった、限界があるようにしか見えなかった。けれどもこの方は、三日目に墓の穴からよみがえられた。そのことを多く者たちが目撃し証言している。それは何を意味するか。神には、手遅れはないということです。たとえ死んだとしても大丈夫だと言っている。神は信じる者に永遠のいのちを与えてくださると言います。それは、ただ長生きしますというのではない。私たちが失敗したこと、できなかったこと、人を傷つけてしまったこと、取り返しができないと諦めていたこと、それらすべてが正しく回復されていく。それが永遠のいのちの本当の意味です。救いの本当の意味です。

世の人たちも言います。「死んだ者がよみがえるはずはない。死んだら終わり。手遅れで、元に戻せない。」

でもだれがいったいこの世界を造られたのでしょうか。聖書の神こそ、私たちを土のちりからかたちづくり、いのちの息を吹き込んで下さった方です。その方に、できないことがあるというのでしょうか。必ず正しいところに私たちを戻してくれる。そのために神はあらゆる手を尽くし、救いの計画を前進させていきます。この救いを信じて歩んでまいります。